

平成28年度
No. 4
12月6日

全連小速報

全国連合小学校長会事務局
東京都港区西新橋1-22-14
電話 03-3501-9288
発行人 会長 大橋 明
編集人 広報部長 今城 徹

「変革 チャレンジ 未来創造」

— 「社会の変化に主体的に関わり

共に豊かな未来社会の創造に挑む子どもの育成」を目指して—

第68回全連小研究協議会高知大会成功裡に終わる

平成28年10月27日(木)～28日(金) 高知県立県民体育館及び周辺会場

自由民権運動発祥の歴史をもち、常に新しく自由な発想で文化を発展させてきた高知県。そして近年、ひとつの大家族「高知家」として、県民総意のもと人々のつながりや絆を育む取組を展開している高知県において、10月27日(木)・28日(金)の2日間、第68回全国連合小学校長会研究協議会が全国から約2,500名の参加者を得て、盛大に開催された。

本大会は、新たな研究主題を掲げて4回目の研究大会となる。1日目は、開会式・全体会の後、13の分科会に分かれて「校長の果たすべき役割と指導性」について活発な協議が行われた。2日目には、森澤紳勝氏・白田久子氏・山本一力氏をシンポジストに迎え、「変革 チャレンジ 未来創造」をテーマとしたシンポジウムが、種村明頼調査研究部長の進行で行われた。

閉会式では、佐賀大会に向けての橋渡しが行われ、最後に高知県ゆかりの漫画家 やなせたかし氏作詞の「手のひらを太陽に」を合唱し、感動のうちに幕を閉じた。

大会主題

新しい知を拓き 人間性豊かな社会を築く

日本人の育成を目指す小学校教育の推進

～社会の変化に主体的に関わり 共に豊かな未来社会の創造に挑む子どもの育成～

開会式

- 1 開会のことば 阪口正治 大会副会長
- 2 国歌斉唱
- 3 あいさつ 大橋 明 大会会長
片岡忠三 大会実行委員長
- 4 祝辞 文部科学大臣 松野博一様
(代読 文部科学省初等中等教育局視学官 藤原一成様)
高知県知事 尾崎正直様
高知県教育委員会教育長 田村壮児様
高知市長 岡崎誠也様
(代読 高知市副市長 吉岡 章様)
- 5 来賓紹介 島崎雅彦 大会実行副委員長
- 6 閉式

今こそ求められる校長のリーダーシップ

大橋 明 大会会長

第68回全国連合小学校長会研究協議会高知大会が全国各地から多くの参加を得て歴史と文化の地、ここ高知で盛大に開催できることに心からお礼申し上げる。

また、文部科学大臣 松野博一様代理・文部科学省初等中等教育局視学官 藤原一成様、高知県知事 尾崎正直様、高知県教育委員会教育長 田村壮児様、高知市長 岡崎誠也様代理・高知市副市長 吉岡章様、高知市教育委員会教育長 横田寿生様をはじめ多くのご来賓の皆様にご臨席を賜ったことに、全国小学校長会を代表して心より感謝申し上げます。

現在、学習指導要領の改訂をはじめとして、



教育改革が急速に進んでいる。私たち校長は、これからの時代を力強く生きていくことのできる子どもを育てるといふ学校本来の役割をもう一度自覚し、教育における不易と流行を見極め、校長としての使命を自覚し、将来への展望をもち、理想の実現に邁進していかなければならない。

今回の学習指導要領改訂では、カリキュラム・マネジメントを通じて、子どもたちが「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」を組み立てていくことが求められている。社会で生きて働く知識や力を育むためには、「どのように学ぶか」という学びの過程の質を高めていくことが重要となる。この鍵となるのが「主体的・対話的で深い学び」を実現するための学習指導の改善である。物事に対する見方・考え方を身に付けて深く理解したり、多様な人との対話で考えを広げたり、学ぶことの意味と自分の人生や社会の在り方を主体的に結び付けたりしていくという学びが、生きて働く知識や力を育む。このような学習指導を行うためには、全教職員で授業改善に取り組める学校の体制をつくるが必要になってくる。今ほど校長のリーダーシップが求められているときはない。

全国連合小学校長会は、「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す 小学校教育の推進」を研究主題として掲げて4年目を迎えた。この研究主題は、新しい学習指導要領が目指そうとしている理念と軌を一にするものだと捉えることができる。この研究主題のもと、教育実践と研究活動を積み重ね、学校経営の充実を目指してきた。

こうした中、本大会が、「社会の変化に主体的に関わり、共に豊かな未来社会の創造に挑む子どもの育成」を副主題に開催されることは、誠に意義深いことであり、今後の研究及びその成果を生かした全国の小学校の教育活動に大きく貢献することを確信している。

本大会の運営を推進してきた実行委員長の片岡忠三様をはじめとする各役員の皆様方、四国地区小学校長会の皆様方、高知県小学校長会の

皆様方など、関係の皆様方に深く感謝申し上げて、挨拶とする。

「志」というバトンを引き継ぐ

片岡忠三 大会実行委員長

美しく豊かな自然に恵まれたこの土佐の高知において、多くのご来賓の皆様のご臨席を賜り、第68回全国連合小学校長会研究協議会、並びに第59回四国地区小学校長教育研究大会を盛大に開催できることは、大きな喜びであるとともに、その責任の重さを感じている。

今日、我が国では、社会が大きく変化するとともに、豊かな未来社会を築くためのまさに厳しい挑戦の時代を迎えようとしている。このような変化の激しい社会を生き抜く日本人を育成するためには、社会の変化に主体的に関わり、課題解決を図る豊かな創造性やしなやかな知性といった、新たな知を生み出す力を養うことが必要になってくる。

高知県は、「凡事徹底・凡事一流・継続は力」を合言葉に、これから迎える挑戦の時代を生き抜く子どもの育成に取り組んできた。高知大会では、副主題を設定するとともに、大会コンセプトを「変革 チャレンジ 未来創造」とし、校長の果たすべき役割と指導性を究明しようとした。三重大会から設定された大会主題や副主題を具現化する上で最も大切な場である分科会では、学校組織マネジメントの視点から校長の果たすべき役割と指導性が明確になる提言をお願いした。シンポジウムでは、高知県ゆかりのシンポジスト3名に、大会コンセプトに沿い、厳しい挑戦の時代を生き抜く子どもたちの育成に向けて、熱く語っていただく。

2018年に迎える「明治維新150年」に向けて、薩長土肥の4県が、各県の観光産業の育成・強化を図るため広域観光プロジェクトを発表した。教育においてもこの年には、新教育課程実施に向け明確な方向性が示される転換期に、長州山口から、土佐の高知、そして肥前佐賀へと、「志」というバトンを引き継ぐことになったのは、何かの縁であると思っている。

今大会の開催にあたり、ご指導とご助言をいただいた文部科学省、高知県、高知県教育委員会、高知市、高知市教育委員会の皆様をはじめ、関係諸団体・機関、全連小役員、事務局及び関係の皆様方に厚く感謝を申し上げ、挨拶とする。

文部科学大臣祝辞代読（要旨）

文部科学省初等中等教育局視学官 藤原一成様

本年、4月に発生した熊本地震、今から5年7か月前に発生した東日本大震災は甚大な被害をもたらしたが、復旧・復興に向けて並々ならぬご尽力をされた教職員の皆様方に改めて感謝

するとともに、心から敬意を表する。文部科学省としても、被災からの復興に、引き続き、全力で取り組んでいく。10月21日に発生した鳥取県中部の地震においても学校施設等に被害が出ている。関係者の皆様方にお見舞い申し上げるとともに、必要な支援に努めていく。

教育は未来への先行投資であり、教育再生なくして、我が国の成長はない。教育再生実行会議の議論等も踏まえ必要な施策を推進していく。また、「一億総活躍社会」の実現と「地方創生」の推進に向けて、学校と地域が一体となって連携・協働し、子どもの成長を支え、学校を核として地域社会が活性化するよう、「次世代の学校・地域」の創生を進めていく。

これからの教育では、将来の変化を予測することが困難な時代をたくましく、しなやかに生きていく力を育てていくことが重要である。本年8月、中央教育審議会において、次期学習指導要領の改訂に向けたこれまでの審議のまとめが出された。学校と社会が連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子どもたちに育むという「社会に開かれた教育課程」という理念のもと、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指し、学習や授業の質的改善を図っていく。小学校学習指導要領については、来年3月に告示を行い、平成32年4月から全面实施する予定である。

依然として、いじめに起因すると考えられる深刻な事案が発生している。各学校においては、子どものSOSを早期に受け止め、学校内での情報共有、警察をはじめとする外部機関との連携など、適切に対応する取組の充実と「いじめ防止対策推進法」に基づいた対策の確実な実施をお願いする。

先を見通すことの難しい時代をたくましく生き抜いていく上で大切なのは、生涯を通じて不断に学び、考え、予想外の事態を乗り越えながら、自らの人生を切り拓き、他者と協力し合ってよりよい社会づくりに貢献していくことのできる力である。子どもたちに、社会で自立していくために必要な真の学ぶ力を身に付けさせなければならぬ。

本日、全国より校長の皆様方が一堂に会して開催される本研究協議会の意義は、大変大きいものであると考える。本大会が所期の目的を達成し、多大な成果が得られることを期待するとともに、本大会を主催される全国連合小学校長会の益々の発展と参会者の一層の活躍を祈念して、お祝いの言葉とする。

高知県知事祝辞（要旨）

高知県知事 尾崎正直様

日頃より、義務教育の充実に向けて多大なるご尽力をされておられることに、心より敬意を表する。

高知県は、様々な形でチャレンジをしている。創造性豊かで志に溢れた人々がたくさんいる県だと自負をしている。

しかし、高度成長期に若者が大量に県外に出ていった結果、平成2年、全国でも真っ先に人口が自然減となった。それに伴う経済の縮みや、中山間地域の衰退に伴う福祉ネットワークの困難さなど、様々な形で課題に直面している。火山災害以外はおよそ全ての災害がある災害多発県でもある。そうした中、いかにして生涯にわたって学び続けるたくましい子どもたちを育てていくかということは、本県にとって大きな課題である。私は、教育再生実行会議の委員も拝命しているが、高知県の課題は、今後、全国での課題になってくる。一部には、人口が減少しているのだから教員の数や大学の定員を減らしてもよいのではという議論があるが、人口が減少していて、いろいろな意味で困難に直面する時代だからこそ、時代を切り拓く人材を強力に教育していかなければならないと思う。今年の4月からスタートさせた新しい教育大綱では、「チーム学校の推進」「厳しい環境にある子どもたちへの確実なサポート」「地域を挙げた取組」の3つを柱としている。

本大会において、皆様方の知見が交換され、優れた成果が生み出され、明日からの義務教育の充実につながっていくことを願うとともに、日本の教育の更なる充実を祈念して、お祝いの言葉とする。

高知県教育委員会祝辞（要旨）

高知県教育委員会教育長 田村壮児様

昭和59年の第36回大会以来、32年ぶり2回目の高知市での開催を大変うれしく思う。

国では、次期学習指導要領に向けて検討が行われており、8月に公表された「これまでの審議のまとめ」では、「何を学ぶか」に関しては小学校の英語の教科化など、「どのように学ぶか」に関してはアクティブ・ラーニングなど、教育課程全般にわたるものとしてカリキュラム・マネジメントへの取組などが打ち出されている。また、学校に求められる役割が拡大する中、教員の多忙化が課題となっており、教員が子どもたちと向き合う時間を確保するための環境整備も急務になっている。高知県では、こうした課題を踏まえた教育大綱を策定し、県教育委員会では「第2期高知県教育振興基本計画」を策定した。学校教育に関しては、「チーム学校の構築」「厳しい環境にある子どもたちへの支援」「地域との連携・協働」という3つの柱を示した。特に「チーム学校」については、全ての取組の柱と考えている。

本大会が、全国の校長先生方の熱心な協議を通して、成果を上げられることを期待し、お祝いの言葉とする。

高知市長祝辞代読（要旨）

高知市副市長 吉岡 章様

高知市での盛大な開催を、心からお喜び申し上げますとともに、お越しいただいた皆様方を歓迎申し上げます。また、それぞれの地域での学校運営をはじめ、地域や家庭との円滑な連携を推進するリーダーとしてのご活躍に深く敬意を表する。

高知市は、「夢と希望にあふれる『にぎわいと暮らし 安心のまちづくり』」を将来像として掲げ、様々な事業を展開している。本市の未来を担う子どもたちの育成については、知・徳・体のバランスのとれた成長を目指し、学力や体力の向上、生徒指導対策を中心とした道徳教育・防災教育などに取り組んでいる。

社会の変化に主体的に関わり、他者と協働しながら未来社会を創造していこうとする子どもたちを育成するために、校長先生方が果たされる役割は、大変大きなものがある。

本大会の成果が、小学校教育のみならず、今後の学校教育全体の充実・発展につながることを期待し、お祝いの言葉とする。

文部科学省講話（要旨）

文部科学省初等中等局視学官 藤原一成様

まず、配布した資料は、最新の情報を網羅的に掲載しているので、今後の学校運営に活用してほしい。今回の資料の大部分は、文部科学省のホームページにも掲載されているので、併せてそちらもご覧いただきたい。

さて、教育再生実行会議の動向について説明する。第9次提言の前段では、これまでの学校教育を高く評価している一方で、後段では、十分に力が発揮できない子どもたちがいることを指摘している。

一人ひとりの子どもの力を最大限伸ばすために、必要な教育を提供するという視点に立つことが重要である。そのために、学校が地域社会と連携し、包容力を高め、懐深い教育を展開していくことや、ICT等を活用して一人ひとりの子どもの特性に応じた適切な配慮や支援を充実し、世界で最も進んだ教育を実現していくことが必要となる。その前提として、これまで以上に、学校が共感を基礎として多様な価値を認め、寛容であることが求められる。

なお、資料には掲載していないが、教育再生実行会議の直近の動きを紹介する。新たな検討テーマが2つある。一つは、学校・家庭・地域の役割分担と教育力の充実について。もう一つが、子どもたちの自己肯定感が低い現状を改善するための環境づくりについて、である。

子どもたちの課題として、自己肯定感が低いとの指摘が各方面からある。国の調査でも日本

の若者は諸外国と比べて、自己を肯定的に捉えている者の割合が低いという結果がある。

このような指摘や結果を校長先生方はどう受け止めるのか。日本人には謙譲の美徳があるので調査ではそれが数字に表れているのではないかと言う人もいる。また、自己肯定も大事だが、その前に自己受容が大切だという意見もある。今後の教育再生実行会議の議論に注目いただくとともに、各学校でも機会を捉えて議論してもらいたい。

次に、今後の学習指導要領改善の方向性について説明する。馳前文科大臣の「教育の強靱化にむけて」というメッセージの中で、学習指導要領改善のポイントについて、①ゆとりか詰め込みかといった二項対立の議論に戻らない、②学習内容の削減は行わない、③知識が生きて働くものとして習得され、必要な力が身に着くことを目指す、ということが明確にされた。

本年8月の「次期学習指導要領に向けた審議のまとめ」では、より良い学校教育を通じてより良い社会を創るという目標を共有し、社会と連携・協働しながら未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む「社会に開かれた教育課程」という理念の実現に向けて次のようなポイントが示された。

まず、今回は、これまでの改訂の中心であった「何を学ぶか」という指導内容の見直しに加えて、「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」の視点で学習指導要領を構造的に改善することとしている。

「何ができるようになるか」については、これからの時代を生きる子どもたちに必要とされる育成すべき資質・能力について、①生きて働く知識・技能の習得、②未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成、③学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力、人間性の涵養、という3つの柱で整理している。

「どのように学ぶか」については、「主体的・対話的で深い学び」（いわゆるアクティブ・ラーニング）の視点により、学習過程を改善していく。アクティブ・ラーニングの三つの視点の中でもとりわけ「深い学び」の観点が重要である。

また、各学校には学習指導要領を受け止めつつ、子どもたちや地域の実情等を踏まえ、各学校が教育目標を実現するために、学習指導要領に基づき、どのような教育課程を編成し、どのようにそれを実施・評価・改善していくのかといった「カリキュラム・マネジメント」の確立が求められる。

次期小学校学習指導要領については、来年の三月に告示を行い、平成32年4月から全面实施する予定である。

平成32年は、東京オリンピックが開かれる年である。札幌オリンピックを学校のテレビで見て、感動を級友と共有した記憶が今でも鮮明にある。学校は感動を生む場でもある。次期学習指導要領の改訂を成功させるよう、ご尽力をいただきたい。

第1日 全体会

司会 山本光三 大会実行副委員長

- 1 本部報告
- 2 大会主題・研究課題趣旨説明
- 3 大会宣言に関する提案

本部報告（要旨）

千木良康志 対策部長

4月からの主な本部の活動について報告する。

5月25日、第68回総会・研修会では、馳浩文部科学大臣よりご祝辞を頂いた。また、文部科学省各課からの行政説明があった。

7月11日には、常任理事が、文部科学省・財務省・総務省等に訪問し、子どもたちの将来と我が国の発展のために、人的・物的措置の一層の充実と教育諸条件の整備に向けての6項目の要望活動を行った。

7月30日から7日間、20名の参加者により、ニュージーランド海外教育事情視察を行った。

8月24日に、宮城県亘理町等への「被災地視察」を行った。被災3県との懇談会では、保護者の生活不安・就労不安等による子どもの基本的な生活習慣の乱れ等が課題として出された。

9月25日から10月3日にかけて、3地区対策・調査研究担当者連絡協議会を、東京・大阪・福岡を会場に開催した。

現在、財政基盤の立て直し等を「全連小組織及び運営に関する特別委員会」で、円滑な教育課程の編成に向けた資料作成等を「調査研究部特別委員会」で、この二つの特別委員会で検討を進めている。



大会主題・研究課題趣旨説明

窪田泰行 高知大会研究部長

三重大会から4年目となる研究主題「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」の究明に向け、

各県の特徴を生かし研究がなされてきた。いずれの大会でも視点を明確にした、「新たな知を拓く」研究と「人間性豊かな社会を築く 日本人の育成」の研究に特化したものであった。大会主題の理念を推し進めることを目指し、副主題を「社会の変化に主体的に関わり 共に豊かな未来社会の創造に挑む子どもの育成」と設定し、大会主題の具現化を究明してきた。「新たな知」を、「社会の変化に主体的に関わり、課題解決を図る豊かな創造性やしなやかな知性」と捉え、また、「自立・協働・創造を軸とした人々との絆や支え合う仕組みを重視する社会の形成」を「人間性豊かな社会の実現」と捉え研究を進めてきた。大会キーワードを「改革 チャレンジ 未来創造」とし、本県校長会の方向性として取組を進めてきた。

知識基盤社会に求められる知識・技能の不断の更新はもとより、伝統や文化に立脚し、高い志をもった人間へと成長できるよう、他者と協働しながら、豊かな未来社会にチャレンジする子どもを育成する研究とした。

研究領域については、これまでの大会と同様5領域とした。13の分科会の研究課題や視点については、成果と課題を引き継ぎながらも、内容の明確化、重点化を図り、研究が一層具体的で実践的なものになるようにした。

「研究の継続・発展」「分科会の充実・活性化」「校長の果たすべき役割と指導性の究明」を運営の基本方針とした。発表内容の十分な理解や活発な意見交換ができるように、3大会の成果と課題をまとめた分科会協議資料の作成、発表内容をより分かりやすくするための発表用紙の作成、大会要録の事前のホームページ掲載等も引き続き行った。分科会での提案、小グループでの協議において校長の果たすべき役割と指導性が一層明確になることを願っている。

<分科会の研究課題及び研究の視点>

I 学校経営

第1分科会「経営ビジョン」

研究課題：これからの教育を見据えたビジョンに基づく学校経営の創造

視点1：これからの教育を見据えた学校経営ビジョンの策定

視点2：学校経営ビジョンに基づく意欲的な学校経営の創造

第2分科会「組織・運営」

研究課題：学校経営ビジョンの実現と活力ある組織づくり・組織運営

視点1：学校経営ビジョンの実現に向けた活

力ある組織づくり

視点2：学校経営ビジョンの実現を目指した
学校運営の推進

第3分科会「評価・改善」

研究課題：学校教育目標の実現を図るための評
価・改善の推進

視点1：学校経営の組織的・継続的改善に向
けた学校評価の充実

視点2：職業能力育成に向けた教職員人事評
価の工夫

II 教育課程

第4分科会「知性・創造性」

研究課題：知性・創造性を育むカリキュラム・
マネジメント

視点1：「新たな知を拓く」教育課程の工夫

視点2：豊かな未来社会の創造に挑む子ども
を育てる教育課程の編成・実施・評
価・改善

第5分科会「豊かな人間性」

研究課題：豊かな人間性の育成を図るカリキュ
ラム・マネジメント

視点1：豊かな心を育む教育課程の編成・実
施・評価・改善

視点2：人権感覚を高め、未来を切り拓く人
権教育の推進

第6分科会「健やかな体」

研究課題：健やかな体を育むカリキュラム・マ
ネジメント

視点1：生涯にわたって運動に親しむための
体力・運動能力の育成

視点2：主体的、実践的な態度を育む健康づ
くりの推進

III 指導・育成

第7分科会「研究・研修」

研究課題：学校の教育力を向上させる研究・研
修の推進

視点1：教職員の資質・能力を高める校内研
究・研修の推進

視点2：教職員に将来の展望や学校経営への
参画意識をもたせる研修の推進

第8分科会「リーダー育成」

研究課題：これからの学校を担うリーダーの育
成

視点1：確かな指導理念をもち、優れた実践
力と応用力のあるミドルリーダーの
育成

視点2：鋭い時代感覚を磨き、人間性豊に自
ら学び続ける管理職人材の育成

IV 危機管理

第9分科会「学校安全」

研究課題：自らの命を守る安全教育・防災教育
の推進

視点1：自ら判断し行動できる子どもを育て
る防災教育・安全教育の推進

視点2：家庭・地域・関係機関との連携を
図った意図的・計画的な防災に関わ
る取組の推進

第10分科会「危機対応」

研究課題：様々な危機への対応と未然防止の体
制づくり

視点1：いじめ・不登校等への適切な対応と
体制づくり

視点2：高い危機管理能力の育成と未然防止
の組織体制づくり・連携づくり

V 教育課題

第11分科会「社会形成能力」

研究課題：絆を結び社会形成能力を育む教育の
推進

視点1：社会の発展に貢献する資質・能力・
態度を育む教育活動の推進

視点2：地域の担い手として、豊かな未来社
会の実現に貢献する力を育むキャリ
ア教育の推進

第12分科会「自立と共生」

研究課題：自立と共生を図り、実践的態度や能
力を育む教育の推進

視点1：子どもの自立を図る特別支援教育の
推進

視点2：「持続可能な社会」の担い手を育む
環境教育等の推進

第13分科会「連携・接続」

研究課題：家庭・地域等との連携と異校種間接
続の推進

視点1：家庭・地域と連携し、創意ある教育
活動を展開する学校づくりの推進

視点2：成長の連続性を生かした異校種間接
続の推進



第2日 全体会

司会 山本光三 大会実行副委員長

1 研究協議のまとめ

2 大会宣言文決議

達川浩一 大会宣言文起草委員長

◇ シンポジウム

研究協議のまとめ

窪田泰行 高知大会研究部長

昨日の全体会、分科会を通じ本大会の主題の研究がなされたと思う。本大会主題や各分科会での研究内容や協議内容についての報告を行う。

1 大会副主題・分科会協議について

大会主題を二つの柱と捉えた。一つ目は「新たな知」を「社会の変化に主体的に関わり、課題解決を図る豊かな創造性やしなやかな知性」と捉え、また、「自立・協働・創造」を軸とした、「人々との絆や支え合う仕組みを重視する社会の形成」を「人間性豊かな社会の実現」と捉えた。さらに、大会コンセプトを「変革 チャレンジ 未来創造」とし、三重大会からの3大会の研究と成果と課題を再確認し、分科会の視点と課題を再設定した。

【学校経営】 目指すべき学校像の具現化に向け、発表・協議がなされた。学校組織をマネジメントするための学校経営ビジョンの構築や校長のリーダーシップについて協議され、校長として学校経営ビジョンを明確に示し、課題や具体的な改善等を教職員と共有し、学校をチームとして機能させる重要性や人材育成を目指した人事評価につなげるため、評価者としての力量を高める必要性などが確認された。

【教育課程】 カリキュラム・マネジメントサイクルを円滑に回すための取組が、発表・協議された。全容が明らかになりつつある次期学習指導要領の全面实施に向けた移行期間の在り方についての意見も出された。社会に開かれた教育課程の編成・実施・評価・改善に向けた先進的な実践事例なども報告された。校長としての自らの信念に基づきリーダーシップを発揮しながらマネジメントしていくことの大切さや、客観的なデータをもとにした、ゴールイメージの共有化の重要性が確認された。

【指導育成】 教職員の資質、指導力向上に向けた校長のリーダーシップについて発表・協議がなされた。若手教職員の育成システム作りやOJT・Off-JTの在り方、ミドルリーダーの育成に向けた校内体制の整備や組織体制の強化などが熱心に協議された。校長として、魅力的な管理職やミドルリーダーを育成するために

は、地域との連携、人とのふれあいを通して、人間力を高めていくことが大切であることなどが確認された。

【危機管理】 直下型地震・海溝型地震への防災・減災などの対策や、いじめ・不登校問題の対応としての未然防止、初期対応の発表・協議が行われた。家庭や地域との連携を通じて児童の自主性、自発性の育成や教育行政機関との連携強化について熱心に協議された。その中で、次のようなキーワードが共通していた。命を守りきる・命を大切に作る・校長のリーダーシップ・組織としての取組・教職員の意識向上・若手人材の育成。協議の中で各学校が置かれている取組課題の違いや温度差などが課題として浮かび上がってきた。

【教育課題】 キャリア教育・特別支援教育・環境教育など解決しなければならない今日的な課題について協議された。接続可能な社会をつくる担い手を、学校・家庭・地域が連携しながら広い視野と探究的な学びを通して育成していくことの意義が協議された。校長の企画力、行動力、熱い思いが、地域の担い手としての子どもを育てることに繋がること、各学校が特別支援教育を学校経営の中核に据え、地域全体の意識を醸成するために、市町村単位の校長会が取組を共有することなどが確認された。

2 分科会充実のための運営について

昨日説明した三つの運営方針に沿って申し上げる。まず、協議の深まりや活性化を促すための分科会協議資料や発表用紙については、必要感をもって準備し有効に活用することができた。また、参加者が、ホームページに掲載した資料を事前に熟読して研究協議に参加され、協議の深まりができた。

本大会では、学校教育の方向性について熱心な協議がなされた。社会に開かれた教育課程、アクティブ・ラーニング、それに伴う学習評価等様々な点が協議され、成果を挙げた。一方で、大量退職と若年教員の指導・育成問題、今日的教育課題への対応等、全連小が英知を結集して解決しなければならない課題も山積している。本県校長会においても、総力を挙げて課題解決に取り組んでいく。組織的な取組が、厳しい挑戦の時代である21世紀を力強く生き抜き、日本人としてのアイデンティティをもちながら、世界に羽ばたく日本人を育成する教育の推進に繋がることを確信している。本大会の成果と課題が、大会主題5年目になる佐賀大会に引き継がれ、校長の果たすべき役割と指導性についてより一層の成果が得られることを祈念して、研究協議のまとめとする。

大会宣言

全国連合小学校長会は、結成以来、我が国の小学校教育の充実・発展のため、真摯に研究と実践を重ね、着実にその成果を上げてきた。

本大会では、4年目となる大会主題「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」を掲げ、これまでの三大会の研究成果と課題を引き継ぎ、大会主題の実現を目指し組織をあげて鋭意努力して取り組んできた。

現在、あらゆる分野で知識基盤社会への進展やグローバル化が進行している。また、世界に類を見ないスピードで進む少子高齢化や絶え間ない技術革新等により、社会が激しく変化し、先を見通すことが困難な時代を迎えている。そのような中、我が国では、今後の社会の方向性として「自立」「協働」「創造」の3つの理念の実現に向けた生涯学習社会を構築することが求められている。一方、平成32年に開催される東京オリンピック・パラリンピックを一つの目途に、各分野において様々な取組が進められている。教育においては第二期教育振興基本計画が推進される中、次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめが示され、今年度末には学習指導要領が告示される予定である。

このような国の動向を注視しつつ、東日本大震災の教訓を生かし、「生きる力」を支える知・徳・体の調和のとれた子どもを育成することが学校教育の責務である。また、これからの厳しい挑戦の時代を乗り越え、自立・協働・創造を軸とした人々との絆や支え合う仕組みを重視する、人間性豊かな社会を実現するために、社会の変化に主体的に関わり、課題解決を図る豊かな創造性やしなやかな知性といった、新たな知を生み出す力を身に付けることが求められている。そのため、小学校教育においては、知識基盤社会に求められる知識・技能の不断の更新はもとより、伝統と文化に立脚し、高い志をもつ人間へと成長できるよう、他者と協働しながら豊かな未来社会の創造に挑む子どもを育成することが重要である。

私たち校長は、高知大会における副主題「社会の変化に主体的に関わり 共に豊かな未来社会の創造に挑む子どもの育成」を基盤に据え、小学校教育の推進に全力を傾注し、国民の信託に応えようとするものである。

ここに、第68回全国連合小学校長会研究協議会の総意に基づき、次の決意を表明し、その実現を期する。

記

- 一、新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成
- 一、社会の変化に主体的に関わり 共に豊かな未来社会の創造に挑む子どもの育成
- 一、確固たる教育理念に基づく創意と活力に満ちた学校経営の推進
- 一、「生きる力」の育成を目指した創意工夫ある教育課程の編成・実施・評価・改善
- 一、道徳教育を中核とし、命の尊厳を重視した心の教育の一層の充実
- 一、主体的に判断・行動し命を守る子どもを育成する防災教育の推進
- 一、学校の自主性・自律性の確立と家庭・地域社会との連携・協働による教育活動の充実
- 一、安全で安心できる教育環境づくりの一層の推進
- 一、校長自らの研鑽と、教職員の資質・能力の向上を図る現職教育の充実

右、宣言する。

平成28年10月28日

第68回全国連合小学校長会研究協議会高知大会

シンポジウム (要旨)

『改革 チャレンジ 未来創造』

(要旨)

シンポジスト

日本トリム株式会社代表取締役社長

女優 森澤紳勝氏

作家 白田久子氏

作家 山本一力氏

コーディネーター

全連小調査研究部長 種村明頼



種村 本日のシンポジウムのテーマ「変革
チャレンジ 未来創造」に示された三つの言葉
を中心に進めたい。「変革」では、現在の仕事
に就くことになったきっかけや出来事、現在の
取組等、自己紹介も含めてお話いただく。「チャ
レンジ」では、新たに挑戦していること、これ
からの取組、学校教育への要望等について、「未
来創造」では、豊かな未来社会の実現に向けて
どのように社会と関われるか、学校教育への期
待について伺いたい。

森澤 1944年に足摺岬
で生まれた。あの海の
向こうはアメリカと教
えられて育った。東京
で大学受験に失敗し地
元に戻ってきた。中
学・高校と卓球をや
っていた当時の恩師に勧め
られて代用教員を
行った。その時に、先生は素晴らしい職業では
あるが、ここで埋もれてよいのかと自問し、再
度大学受験を行った。働きながら東京で生活
することは非常に大変だった。サラリーマン時
代は高知で不動産会社に勤めた。そこで、病
気を患い、健康関連の会社を経て37歳で独立
した。1982年に水に関する事業を起したが、
当時は全く相手にされなかった。しかし、東
南アジアを訪れた際に、人々が水を買って
いる現実から、日本でもいけると確信して
いた。しかし、事業はそう簡単ではなかつた。
死ぬことを考えたこともあった。3年目か
らは順調に成長してきた。更に、水に機能
があることも分かってきた。大学との共同
研究も盛んに行われるようになった。今
では、糖尿病、アルツハイマー等に有効
であることの研究も大学と共に進めてい
る。人が使う1日300Lの水の内、飲料
のための2.2Lをよい水に変えたいと思
い日夜行動している。

白田 私は、高知市生
まれで、中学2年生の
時東京の事務所にスカ
ウトされた。小学校6
年生のころからファッ
ション雑誌を読むの
が好きで、当時身長が
168cmあったので、い
つかはモデルさんにな
りたいなと思っていた。スカウトはまたと
ないチャンスと思った。両親とも東京
での生活経験があったので、私の東京
行きには賛成してくれ、高校から東
京の学校へ通った。高校に通いなが
ら少女雑誌のモデルをしていた。24
歳の時に転職となったミスインター
ナショナル日本代表選考大会に出場
した。ファッションモデルとミス
コンとは似ているものと思われがち
だが随分と違う。ファッションモデル
は、服や化粧品を引き立たせること
を、ミスコンは、いかに自分の



外見と内面を美しく見せるかと、引き立てる
ものが違う。スタイルが大事だと思い9kgの
ダイエットを行った。世界大会へ向け表面的
な美だけでは薄っぺらいと感じた。健康面
でも痩せすぎではだめだと感じた。野菜の
大切さを感じ、野菜ソムリエの勉強を始
めた。目に見えて体が変わっていくこと
を通して、益々勉強を始めた。今は、コ
スメコンシェルジュの資格を取りたいと
思っている。

山本 2002年、53歳の
時に直木賞を頂いてから
原稿に追われる生活
が始まった。こうして
人前で話をする機会を
得たのもその頃だった。
振り返ってみるとこう
したことができるのは、
小学校の6年生の時に、



恩師から思い切り物事の基本を教わった
からだとふっと気付いた。昭和23年生
まれなので、小学校へ通い出した頃は
昭和29年だった。その段階で小学校
の先生をされていた人は、一人の例
外もなく戦争を潜てこられた。戦争
のことは知識として悲惨であること
は知っているが、それを語る多くの
者が戦争を体験していない。私を
教えてくれた先生は、明日が来るか
どうか分からない極限を背負いなが
ら戦火を潜てこられた。二度とこん
なばかげた戦争を起こしてはいけ
ないという強い使命感をもって子
どもと向き合っておられた。私の
恩師は、戦争中海軍に召集され、
ミッドウエイ海戦を体験された方
だった。当時はそんなことを知る
由もなく、私が60歳を過ぎたころ
に先生のお宅を訪ねて初めて知
ったことだった。先生は、6年の
子どもに、毎回、「メイドイン
ジャパンの品は世界から粗悪品
だと言われているが、決して日本
はそんな国ではない。この国を、
また、世界から尊敬される国に
するために君たちは勉強しろ。中
学校へ行ったら英語を学ぶ。学
んだ英語を使って世界を相手に
できるように頑張れ。そのために
勉強しろ。」と繰り返し話され
た。何のために勉強をするのか
明確に教えてくださった。

「時代を担う君たちが、日本という
国をいい国にしてくれ。」先生は、
自分たちがやってきた戦争を真正
面から話され、子どもたちに詫
げられた。あの時代の先生は、言
葉は乱暴だったが、子どもたちは、
先生が、どういう気持ちでその
言葉を発していたかを察していた。
本音で語られることを知っていた。
なぜ先生がそのことを話すのか
をくみ取りながら生活をしてい
た。教育の入り口にある小学校は、
人生を決定する大事な教育の場
であると、68歳になる今、確信
している。変革ということは、同
じことを繰り返していても、繰
り返す中身がどうなっているか
を把握していれば、立派な変革
と確信している。

白田 私のターニングポイントはミスインターナショナルへの道だった。世界大会が中国で開催されると聞いて中国語の勉強を始めた。当時NHKの中国語講座のアシスタントのオーディションがあり、応募すると合格できた。1年間番組に出演しながら中国語を勉強した。ミスコンは基本的に様々なことを自分一人でやらなければならないのでヘアメイクやネイル等の勉強もした。世界大会は、1ヶ月間世界のミス達と共同生活をした。世界の中には、脚を美しく見せるために脚の腱を切ってきた人もいて、優勝に真剣に取り組んでいることを実感した。

確かに、売れているとされる芸能界の方は、目に見えないところで努力をしている。

世界大会は、中国ではなく、東京で開催された。そこで、入賞こそしなかったが、フォトジェニック賞を頂いた。賞を頂いて初めて、支えてくれたたくさんの人への涙を流した。

私も、山本先生と同様に、小学校の先生に感謝している。姿勢がよいと評価されるが、その基礎は小学校にあった。

山本 ある出版社の100周年を記念して、100人の作家に描き下ろしを依頼する企画が出された。その一人に私も選ばれた。名誉なことなので思い切りやろうと決めた。色々取材をして最終的に行き着いたのが、高知県の西、足摺岬に近い中濱村に住む中濱萬次郎(ジョン万次郎)だった。万次郎が、日本人として初めてアメリカ大陸に足を付けた、その地を見てみようと思つた。挑戦という文字を頭に置いて実行したものではない。ジョン万次郎を書くということは決まっていたので単なる取材であった。描き下ろしは仕上げたのだが、万次郎が過ごした人生というのは、とても単行本一冊で収まりきらないものではない。書いていく途中でそれが分かったもので、出版社と話し合っ、単行本は出すが、その続きを書くことを決めた。それは、未だに続いている。

アメリカに取材をして8年以上が経つ。取材を続けていて、アメリカの大きさ、文化、成り立ち等が見えてくる。それらのことを題材にした短編を書き始めている。物書きには、その地に暮らす人々がその地でどう生きているかを見ることが必要である。

校長先生方は、あえて、挑戦という言葉を使わなくても、子どもたちが日々何をやっているか、昨日とどう違うのかを見ていくことで、子どもたちの挑戦が見て取れるのではないかと。子どもたちが毎日、何に向かって挑んでいるか、そのことを一番近くでご覧になれる校長先生方は、大変高貴で価値ある仕事だと思つた。

森澤 企業は強いから、大きいから生き残るのではない。時代に即応する、時代に対応する企業が残っていく。その証拠は、報道等のおりである。時代の要請に合わないものは銀行だろうと淘汰されていく。5年後、10年後に即応し

てきちんと手が打っているかが大切である。私たちは医療機器を扱っているので、エビデンスがしっかりしているかが重要だ。何かを問われても、きちんと答えることができることをやっていかなければならない。間違いなく、企業は老化する、権力は腐敗する。企業の老化を防ぐには、若い人の抜擢であろう。私の会社では、支社長、所長等で送り出す時に、必ず、「君は抜擢ですよ。」と話して人事異動を行っている。「まだその任にあらず」ということをきちんと伝えていく。

人工透析に我が社の水を使っていくこと、中国での糖尿病・透析にも協力している。今後は、飲料からグローバルなメディカルカンパニーへ成長していくことが我が社の挑戦である。

我が社では、スポーツマンを採用している。それは、努力することの大切さを知っているからだ。人生に僥倖はないのだから、学校では、努力することの大切さをぜひ教えてほしい。

山本 土佐藩の逼迫した財政を立て直したのは若干22歳の奉行、野中兼山だった。徹底した経済政策をやり続けたために、多くの人から恨みを買って失脚した。その兼山を高知の4年生が、光の部分や影の部分に分け隔てなく学んでいた。

自分たちの住む場所に、どういう人がいてくれて誰の力で今があるかを、頭の柔らかい子どもの時にしっかりと学んでほしい。

森澤 医療改革をやりたい。日本人の平均寿命は男性が81歳、女性が88歳だが、健康寿命は男性で10歳、女性で12、3歳の差がある。医療費は40兆円、年々増えている。予防医療に力点を置かないとならないと思う。

資本主義が終焉を迎えようとしている。お金がお金を生む時代はおかしい。自然災害に対する畏敬の念が薄れていくようにも思える。

やがて、世界の国境がなくなると思っている。学校教育では、その時に備えて、他者への思いやりが必要となる。正しい価値観を身に付けさせてほしい。

白田 昨日2016年のミスインターナショナル日本代表が決まった。私は、2007年のミスなので、10名の後輩がいる。後輩を育てる際に心掛けていくことは、良い部分を見つけていくことだ。正解がない部分は、褒めて伸ばすことを心掛けていく。

種村 私たち校長は、多くのご示唆を頂いたことを今後の学校づくりに生かしていきたい。

閉 会 式

- | | | |
|---|--------|---|
| 1 | 開 式 | |
| 2 | あいさつ | 大橋 明 大会会長
島崎雅彦 大会実行委員長
下川雅彦 次期開催県代表 |
| 3 | 閉会のことば | 本間 俊 大会副会長 |

第224回 理 事 会

10月26日(水) 午後1時45分開会

高知会館「白鳳」

進行 田野口 庶務部長

1 開会のことば 阪口 副会長

2 会長あいさつ(要旨) 大橋 会長

今年度は自然災害が多い。被災された地域の皆様方に心よりお見舞い申し上げ、校長先生はじめ教職員の皆様方のご尽力に深く感謝する。

明日からの全連小高知大会は、研究主題「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」を掲げて4回目の大会であり、これまでの研究の成果が問われる。理事の皆様のご協力をお願いします。

(1)中央教育審議会の総則・評価特別部会、各学校種別の部会、各教科等の作業部会で行われてきた審議も実質的に終了し、「次期学習指導要領に向けた審議のまとめ」が出された。今後、今年中に答申が出され、今年度中に新学習指導要領が告示されると言われている。小学校は平成30、31年度が先行実施期間、32年度から全面実施となる。今回の改訂はこれまでと異なり、「社会に開かれた教育課程」を目指し、学習指導要領を「学びの地図」となるように枠組みを見直している。また、「カリキュラム・マネジメント」を通して、子どもたちが「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」を組み立て、学びの質を高めることを目指している。今回の改訂では「どのように学ぶか」について示されているのが特徴である。「主体的・対話的で深い学び」について、全教職員が具体的な子どもの姿として共通理解し、指導体制や指導方法の工夫・改善を図ることが重要であると考えている。全連小としても、調査研究部の特別委員会において全面実施に向けての資料作りを行っているので、ご期待いただきたい。

(2)8月の終わりに、国の来年度予算編成に向けての概算要求が文部科学省から出された。まず、東日本大震災で被災した児童・生徒の学習支援として、復興特別会計から先年度と同じ1000人を要求したが、課題は山積しており、今後も継続していくべきと考える。今回の概算要求は、「『次世代の学校』指導体制実現構想」と題した、来年度から平成38年度までの10か年計画である。次世代の学校の創生に不可欠な教職員の配置充実と、国民に追加的な財政負担を求めないように最大限努めることを掲げ10年間で2976

人の増を計画している。教職員の配置充実には、通級による指導や外国人児童・生徒の指導を行う教員を基礎定数化することが盛り込まれている。

つまり、義務標準法を改正し、安定的で計画的な教員採用・配置を促進することをねらっている。法制化されれば、毎年、財務省と折衝をせずに済む。児童・生徒数が減れば、教員数も減るが、文部科学省の財務担当者は、通級指導や日本語指導を必要とする児童・生徒の数は、当分の間、減ることはないだろうと見込んでいる。今後の変化を注視していく必要がある。

(3)全連小の通常会計が非常に厳しい状況になり、昨年度、先輩方の血と汗の結晶である基金を1億円取り崩し、通常会計に繰り入れた。その後、対策部に特別委員会を設置し、財政健全化に向け、検討を進めてきている。しかし、ここ数年、会員数が毎年ほぼ250人ずつ減少しており、今後もこの傾向が続くことが見込まれる。予算総額は単純に年間1625000円ずつ減少していくと考えられ、予想以上に物価も上昇している。今後も、切れる部分は切っていく方針であるが、このままでは、平成30年度には次年度の予算立てが困難になり、活動を休止せざるを得ない状況になることが予想される。理事の皆様方には、19年間据え置いてきた負担金の増額が、全連小の活動の質を担保する観点から必要な措置であることをご理解いただきたい。

3 報告 司会 本間 副会長

(1) 会務・事業・活動の概要 田野口 庶務部長

(2) 会計について 加藤 会計部長

・基金管理状況 ・果実会計管理状況

(3) 研究大会について

・高知大会について 片岡 高知県会長

・佐賀大会について 下川 佐賀県会長

開催日：平成29年10月12日(木)・13日(金)

参加者増員と割当への協力依頼

(4) 要望活動について 千木良 対策部長

・「教職員定数の更なる充実を求める要望書」(6月14日に関係国会議員に提出)

・「小学校教育の充実に関する文教施策並びに予算についての要望書」(7月11日に文部科学省・財務省・総務省に提出・説明)

・教育23団体「次世代を担う子どもたち一人

一人にきめ細やかな教育を実現するための教職員定数の改善を求める全国集会」への参加（11月1日）

- ・各方面への意見表明①「教員の長時間勤務の是正に関する議員連盟へのヒヤリング」において②「デジタル教科書の位置づけに関する検討会議の中間まとめ」に対して③「新しい学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ」に対して④「教科用図書検定」等に対して

(5) 東日本大震災被災地視察等について

千木良 対策部長

8月24日に大橋会長外3名で宮城県亶理町立荒浜小学校・中学校、旧山元町立中浜小学校を訪問。夕刻から場所を仙台市に移して懇談会を開催。福島県における放射線対策という固有の課題はあるが、概ね3県ともに課題は共通していた。また、①保護者の将来不透明な生活不安や就労不安等による子どもの基本的な生活習慣の乱れ②保護者間格差の広がり子どもに与える影響大③被災した子どもたちを支えている保育士や教職員の疲労感、ストレスに対応した心のケア等の新たな課題が出現していることが分かった。3県が共通に挙げた強い要望は、加配教員（復興加配）やスクールカウンセラーの継続配置だった。8月29日には、福島県小学校校長会主催で「復興に向けた課題及びその解決のための原発視察研修会」が開催された。復興までまだ相当の年月がかかることが実感できた。また、10月21日に鳥取地震については、大きな被害が報告されており、今なお避難所となっている学校もあると聞いている。心からお見舞い申し上げ、一日も早い復興をお祈り申し上げる。（杉本鳥取県会長の報告・お礼）

(6) その他

- ・海外教育事情視察報告 稲垣 団長

4 情報交換「地域と学校の連携・協働の状況について～コミュニティ・スクール、地域学校協働本部等～」

司会 尾形 常任理事

北海道 コミュニティ・スクールを重点点検強化項目に掲げ、29年度には小中の1割である180校が目標。マイスターの派遣・推進会議の開催等を通して推進。

山形 2つの町にコミュニティ・スクールがある。1つは3小1中での小中一貫教育を通して町ぐるみの教育を実践。1つは8小1中により、学校運営協議会・学校支援地域本部の2組織を核に「郷土とともにある学校づくり」を推進。

東京 コミュニティ・スクールを25%の区市町村、195校で実施。割合は15.2%。推進には各自治体それぞれの考え方が影響し、様々な取組がある。学校が核となって地域をつくっていくという段階からの取組が必要な所もある。

栃木 コミュニティ・スクールは1地区での実施だが、地域との連携は推進されている。2年前から各小中学校に地域連携教員を置いているが、専任ではなく、後継者がいないことも課題。

岐阜 県内の約1/4で実施。全ての学校がコミュニティ・スクールという地域もある。学校評議員会や町づくり協議会等の既存の組織を活用。統合を機に実施した学校、小中の連携を強化して取り組んでいる学校などがある。

静岡 静岡市では本年度、小学校1校がコミュニティ・スクールの指定を受けた。学校評議員会制度を拡充する形で学校と地域が連携。将来的には同一中学校区での施設分離型の小中一貫教育と合わせて推進していく計画。

大阪 大阪市にはコミュニティ・スクールはないが、全ての学校に学校協議会が設置されている。学期に1回、年間3回程度開催される。土曜授業の際などに地域と連携して防災訓練を行ったり、積極的に地域人材を活用した取組を行ったりしている。

京都 京都市では全ての学校が学校運営協議会を立ち上げている。学校の応援団・ご意見番として位置付けている。形骸化させることなく継続し、連携して地域の子どもを育てていくことが課題。

山口 本年度より、県内全ての小中学校がコミュニティ・スクールに。学力向上・人材育成と並ぶ県教委の重点施策の一つ。学校運営・人材育成に比べて地域貢献が課題。中学校区ごとの教育ネットでの取組も推進。

高知 学校支援地域本部事業として指導主事4名が配置され、コーディネーター役を担っている。地域によっては、全中学校に地域学校協働本部が設置されるとともに、退職教員のシニアネットワークの強いサポートを得ている。

宮崎 小中学校349校中93校がコミュニティ・スクール。地域学校本部については28市町村のうち15市町村に52設置。地域コーディネーター1名が加配されている地域もある。独自の組織でも学校と地域の連携が推進されている。

5 連絡・その他

- (1) 広報部より 今城 広報部長
- ・教育研究シリーズ第54集の購読協力依頼

6 閉会のことば 阪口 副会長